

## 教職課程の実践における職業的レリバンス—加藤報告へのコメントとして—

### The Relevance of Practice to the “Occupation” in Teacher Education Curriculum —A Remark on Kato Report—

白幡 真紀 (仙台大学)

Maki SHIRAHATA: Sendai University

#### 1.はじめに

本稿は、2022 年 12 月 10 日に開催された名古屋産業大学職業教育研究センター開設記念シンポジウムにおける加藤聡一氏（大同大学）の報告「工学系大学における教職課程の実践—デューイの growth 論を参照して」に対するコメントである。本稿では、当日時間が制限されていたことによりディスカッションでできなかった点にも触れ、職業とのレリバンスから考える加藤報告の事例の特徴、そして今後の教職課程の課題や展望を示したい。

#### 2.報告事例の特徴

加藤報告は、加藤氏が所属大学における教職課程（工業・数学・情報）において、デューイの growth 論および occupation 論を基に教職コア科目の教授と実習等の実践を組み立てた画期的な試みを報告している。この実践の詳細については、加藤報告のご寄稿をご覧くださいこととしたい。

本報告における実践の画期的な点は 5 点ある。第一に、その特色であるデューイの教育哲学の理論を実際に講義・実習・ゼミ等を通して学生（教員志望でない学生も含む）に対し、実践しているという点であろう。教職課程に携わる教員でデューイの名を知らぬ者はいなくとも、その理論を自分の担当する科目や演習において具体的に実践している教員は多くないのではなかろうか。

第二に、学生ひとりひとりのモチベーションや興味を最大限に引き出す仕掛けが取られている点である。たとえばメッセナゴヤのイベント見学や「くだらないものグランプリ」など、ものづくりの視点を取り入れた楽しさを入口に、個々の興味から目的へ、そして具体的な学びの実践へという道筋へと見事に導かれることとなる。

これと関連して第三に、本実践においてはデューイの教育哲学の思想や理論を教

授・実践するだけではなく、現在の教育課程や学校教育の枠組みにどのように適用されるのか、相互の関連を通しての学びについても各所にプログラムされている。

そして、第四にその実践は 4 年間のカリキュラムに沿って行われる。すなわち、学生の成長や興味・生来の成長、学習の進展に沿って、それぞれが自身のポートフォリオを作成することができるのである。

最後に、こうした実践や関連する様々な情報を、加藤氏が HP や SNS を通じて幅広く公開している点も注目に値する。加藤氏のプラットフォームを通じて、加藤ゼミの学生だけではなく、幅広いユーザーがそのリソースの恩恵に預かれるのである。

#### 3.本実践における職業的レリバンス

教員養成ではなく、職業との関連という視点からこの事例を見た場合、この仕掛け・枠組みのエッセンスは実にキャリア教育的であるといえよう。「キャリア教育的」という用語が適切かどうかかわからないが、この試みは「自分を知る」ことを軸にして、自身の興味（目的）、そして「自己アピール」から職業、周囲との関係、その後の人生を想像・計画し、これらすべてを巻き込んでデザインしていくという、まさにキャリア教育が目指す実践が詰め込まれている。

学生は「エンジョイ〇〇」という自分の幹を基に、その根にあるものを見つめ、そして学びや興味（目的）の枝葉を伸ばしていく。何を学んだか、逆に学んだことは自分のエンジョイとどう結びついているのか、これをワークシート等へ書き込むことにより可視化、共有できるようにしている。1 年次の教職コア科目から段階を踏んで「自己アピール」は「教育的信条」へ具体化される。さらに、講義で学んだ事項とこれらはどう対応するのかについても各自が考える必要がある。これらは「学び」のみではなく、これまで自分が行ってきた活動や経験とも有機的に結び付けて

いかなければならない。

こうした枠組みは加藤氏が長年行ってきた試みを原型としながらアップデートを重ねて今の形になったものと愚考するが、さらに今後も進化を続けていくのであろう（本人に確認する必要はあるだろうが）。教職課程の試みでありながら、教員採用試験の合格のみを念頭にしているわけではない。どの職業においても通用する、いや必要となるそれぞれの自己の **growth** を自覚することが中心となっているため、非常に汎用的な枠組みとなっているのである。

「エンジョイ」というレンズを通して、これから働くことを通してどう人生を形作っていくのか、「エンジョイ」が必要とする何を学ばなくてはならないのか、そしてエンジョイをこれまで生きてきた自分とどのように結び付けようとしているのか。これらを学生本人が自覚的に選び取ること（実際には選択の余地はそれほどないにしても主体的に選択しているように導かれている）、これがこの実践における職業とのレリバンスとして中核となる重要な点である。教育の中の職業的専門性の育成と、学びの選択を通じた人間としての成長は両輪なのである。

#### 4. 教職課程の課題と展望

職業・キャリア教育としての側面について先に触れたが、本事例は教職課程の実践であり、当然、教員養成を主眼においている。加藤氏は担当しているいくつかの教職課程科目において、例えば自己の学びと学習指導要領の重要事項をどう対応させるか、あるいはエンジョイがどのような教育的信条（教師としてのあり方や授業・クラス運営のビジョン、学校や地域における具体的活動）に生長するのかなどを実践している。これこそが、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」を体現する工夫ともいえよう。

しかし、これらの試みは教員養成ならびに職業教育の観点からも非常に有用で、かつ汎用的な枠組みでありつつも、これが他大学の

教職課程で実現できるか、ということ、非常に困難であろうと言わざるを得ない。その理由のひとつとして、教職課程はひとりの教員によって行われるものではなく、専門性を持った各科目の集合であるからである。これは逆の面からみると、他科目を巻き込んだの積み重ねを念頭に置いた全体的取り組みが困難であるともいえる。さらに言うならば、教員養成に関わる各教員のビジョンも異なるであろうし、教職課程では特に教員採用試験対策を重視したい大学も多々あるであろう。

そして、昨今では再課程認定の動向に見られるよう、大学教育の質的担保の名の下に、教員の講義の自由度や裁量も減る傾向にあり、評価や基準においてもより画一的な方向性が示されている。主体的な取り組みを習得するべく求められていても、これらを試行錯誤する余裕が十分にあるわけではない。

他所での適用が困難であったとしても、この実践が教員養成そして職業教育のベストプラクティスであることは間違いない。当日のコメントでは事前に「今後求められる教員の姿をどのように考えられるか」ということを質問しようとしていたのであるが、この教育実践の中で学生本人が「理想の教員の姿を考える」というのが、加藤実践のコアであろうことが理解できたと述べた。

最後に、例えば加藤研の卒業者で教員になった OB/OG に対し、教職課程の学びで何が役に立ったか、などのインタビュー調査のデータなどが収集できれば、本報告との内容とあわせ、大きな研究上の知見となるのではないかという感想を持った。

しかし研究上の価値もさることながら、私自身、この加藤報告で一番印象的であったのが、何よりこの実践が「楽しそう」という点であった。きっと学生も同じ気持ちで取り組んでいることだろう。こうした学びを得た加藤ゼミ出身の教員が、今後は子どもたちにその楽しさをつないでいってくれることを大いに期待したい。